



認定看護師徽章

感染症から他人を守る、自分を守る ～感染管理認定看護師～

はじめに

私は感染管理認定看護師として病院の感染対策にかかわっています。しかし、感染対策は医療の安全対策と同様に誰かが、ひとりで取り組むべき対策ではありません。そのため、「感染対策チーム」で感染対策活動をしています。もちろん看護師もそのチームの一員です。

このチーム活動から大磯病院の教職員全員、そして面会の方、さらには患者さん自身にも協力をお願いすることもあります。

「私は、交通事故にはあわない。」と断言できる人がいないように、感染症と全く無縁な人もいません。それどころか、私たち人間は感染症の原因である細菌やウイルスと共生してきました。それらがなければ、現代まで人間が生きてこれなかったことも真実です。今回、皆さんにお伝えしたいことは、『感染症から他人を守る、自分を守る』ための感染症対策のお話です。どうぞ、気軽にお読みください。

もし、赤ちゃんを預かったら・・・

「例えば、自宅に赤ちゃんを預かった時の自分たちの行動を想像してください。」と話すことがあります。赤ちゃんを預かった時、風邪をひかせたくはないですよ。おなかもこわしてほしくないですよ。ですからそのために室温や湿度を調整し、また感染症の流行がわかっているならば、あらかじめ自分に有効なワクチンを接種して感染症を予防することも、いとわないと思います。

さらに、屋外から帰ってきた時に、汚れた手で赤ちゃんを触ることはしないで、必ず手を洗います。トイレの後やご飯をあげる時にも手を洗うはず。また、自分の体調が悪い時は、近くによらないかもしれません。食べ物も自分なら大丈夫と思って食べてしまうような、ちょっと賞味期限が切れたものはあげないと思います。それらは、赤ちゃんに害を与えたくないからです。「赤ちゃんが弱い存在」だからです。守ってあげべき存在なのです。

このイメージを基に、病院での感染対策を考えると、健康を害した人が治療を受けに来るところが病院なので、「健康を害した人＝守ってあげるべき存在（＝赤ちゃん）」というイメージが沸いて、患者さんと接するときには手を洗う、咳がでていればマスクをするなど、自分の衛生管理をきちんとすることが自然にできると思うのです。この取り組みは人に感染症を移さないための、基本的なアクションです。

予防は、何事も無い時にこそ、行っておく ＝ワクチン接種

最近では「おたふくかぜ」や「はしか」など小児のウイルス性感染症の発生そのものが少なくなりました。ワクチン接種による効果が大い反面、予防接種をしなかった世代での流行が見られることがあります。感染症が脅威となる場合、ワクチンの関心は高まりますが、この関心は長続きしません。予防は何事も無い時にこそ行っておくべきです。

1. きちんとワクチン接種していれば、職場や家庭の感染予防に役立ちます（インフルエンザ、はしか、おたふくかぜ、風疹、水痘）。
2. スポーツなどで血液、体液と接する際の感染リスクを減らします（B型肝炎）。
3. 高齢者がかかりやすい病気の感染リスクを減らします（肺炎球菌、带状疱疹）。
4. 将来、発がんするものを予防します（B型肝炎、子宮頸がん（予防ワクチン））。

ワクチン接種はこれからも重要性を増していきます。あらかじめワクチンで予防できる疾患は積極的に行っておくべきと考えます。

－筆者紹介－

かわむら とおる
川村 亨

1964年 生まれ。秋田県鹿角郡尾去沢町 出身
1986年 越谷市立看護専門学校卒
東海大学医学部附属病院 入職
2010年 東海大学医学部附属大磯病院 勤務
2014年 感染管理認定看護師 取得